

## 部活動に対する自己効力感の変動と部員としての意識との関連

—強豪高校サッカー部員を対象に—

学校教育研究科 学校教育学専攻  
教育コミュニケーションコース

M10009A

河合俊成

### 【本研究の目的】

高等学校での部活動は、学校教育の一環としての存在意義は大きく、人間形成の場として不可欠なものである。しかし、現在の部活動の在り方は、現実的に上記の目標とかなりかけ離れたものとなっていないだろうか。本研究では、高等学校での部活における真のあり方、つまり多くの困難を乗り越えしかも楽しみながら、結果として多くの意味ある勝利に結びつけていけるかを、現在の高校サッカー活動の実情を考慮に入れ、検討することを目的とする。

具体的には、その元となるものの一つとして、選手の自己効力感の変化に着目し、サッカー活動に対する意識との関連を検討する。その際、自己効力感における、心的側面や環境的側面の重要性について考慮することとする。

### 【調査方法】

(1) 調査対象：T高校サッカー部員高校2年生男子22名（調査終了時には全員が高校3年生になっていた）

(2) 調査手続き：

サッカー部所属の高校2年生男子22名に対し研究の趣旨を説明し、アンケートに回答をしてもらい、その後ICレコーダーでインタビューの録音したのち、文字データに直すこと、データは研究目的のみで使用するなどを説明し了解を得た。その

後、同意書に署名をもらい調査を開始した。

(3) 調査内容：

一人当たり約1時間～1時間半の設定で著者と調査協力者との個人面談式でアンケート及びインタビューを著書の職員室（進路指導室）で行った。

A 一般性セルフエフィカシー尺度

Banduraによる一般性セルフエフィカシー尺度の坂野・東條改訂版（1986）の16項目を用いた。回答は2件法とした。

B 生活習慣、学校生活、友人関係および親子関係についての質問項目

6件法と自由記述で回答を求めた。

C 個人に対するインタビュー

以下の内容を中心とした半構造的形式のインタビューを行った。

第1回：「入学以前のサッカー生活」「入学以後のサッカー生活」等について。

第2回：「現在のサッカーに対する考え方」等について。

第3回：「サッカー生活の振り返りについて」等について質問した。

(4) 調査時期：

第1回目 2011年2月28日～3月9日  
(新チーム結成時)

第2回目 2011年5月27日～6月10日  
(インターハイ予選時)

第3回目 2011年8月22日～8月31日  
(インターハイ終了時)

## 【結果】

### (1) 調査対象者と自己効力感

調査対象者の自己効力感の値を3回の調査で測定した。その結果は、第1回目の平均値において、理論的平均値を少し下回っているものの、第2回目、第3回目は理論的平均値さえも上回る高い結果となった。

### (2) 自己効力感とレギュラーとの関連

成功体験が自己効力感をいかに高めるかの検討としてポジションによる高低を測定した。その結果、レギュラーと非レギュラーに分けられた結果、第1回目においては、レギュラーは非レギュラーよりも自己効力感が有意に高かった。第2回目、第3回目では、有意差は見られなかった。

### (3) 自己効力感と生活様相との関連

自己効力感が周囲の環境とどのように密接に関連しているかを測定した。その結果、自己効力感と生活習慣、学校生活、友人関係、親子関係、部活の楽しみとの関連においては、第1回目で「部活の楽しみ」に比較的強い相関がみられた。第2・3回目で「友人関係」「部活の楽しみ」に比較的強い相関がみられた。また「親子関係」「学校関係」で弱い相関がみられ、選手周囲の環境の良好さが、選手の自己効力感の上昇に何らかの良い影響を及ぼしていることが考えられた。

### (4) 自己効力感の変化パターンの分析

自己効力感の常時上位の選手、常時下位の選手、時期により変動のあった選手についてインタビュー内容を中心に詳しく検討した。

常時上位の選手は、しっかりと自分の置かれている立場、技能を把握し、今何をす

べきか、どのようにしていきたいのかを明確に答えていた。それに対して、自己効力感が常時下位の選手は、回答がかなり抽象的であり、周囲への依存度も高いものが多かった。また、時期により変動のあった選手の回答からは、本人の頑張りがあっても、家族や友人の支えがないと自己効力感が上がらなかったり、ちょっとした言葉のフォローが自己効力感を上げさせたりなど、環境面での僅かな影響によって敏感に上下する様子が伺えた。

## 【総合考察】

自己効力感が高いほど積極的に部活動に参加し、より中心的な存在として活躍できていることが明らかとなった。しかし、非レギュラーでも、高い自己効力感を維持している者もいれば、レギュラーであっても、自己効力感が上がらない者もいた。

本研究の検討からは、先行研究と同様、成功体験が自己効力感の向上に重要な役割を担っていることが確認された。だが同時に、成功体験を上回るほどの、サッカーをこよなく愛する気持ち、そして、選手を取り巻く素晴らしい環境の存在も大きく自己効力感の向上に影響しているということも明らかにされた。

高校サッカーの部活動においては、技術的向上だけでなく監督、コーチの精神的フォロー、家族、友人の温かい見守りなどすべてが、選手のやる気に影響を及ぼすと考えられた。以上のことの何一つを欠いても自己効力感は十分に上昇しないだろう。そのことを理解して導いていくことが必要なのである。

主任指導教員 中間玲子  
指導教員 中間玲子